

目的 被服デザインの研究の対象として、点の錯視現象の実験には、幾何学的な点の考え方をせず、点に若干の面積を与えて考える必要があるため、点の大小と *tension* との関係とか、他の形態と結合させた結果の *illusion* と *tension* との角度から考察した実験を行ってきたが、今回は更に細かく検討を加えるため、54年度に続き実験を試み、比較検討した。

方法 観察テストを試みるため次の資料を作成した。

1) 点の大小と *tension* との関係を考えるための図形 2) 2つ以上の点と *tension* との関係を考えるための図形 3) 点と方形・円形との結合を考えるための図形 4) 点と抽象洋服形との結合を考えるための図形を作成した。

実験は壁面に資料を貼布し、7mの距離より観察せしめ、資料面の照度450 Luxとした。被験者は本学学生1年生49人、2年生89人、3年生84人であった。

結果 錯視現象を充分検討するため、被験者の視力を0.6以下は近視として別に集計したが、両者は比較的近似した値となった。54年度実施した実験結果も同様の傾向である。今回は講義以前にこの実験を行ない、講義を行なって *tension* を理解させた後実施した54年と比較すると、大差はみられなかったが、次のようになった。1) 近視者と正常者は差異は少ない 2) 点を2つ以上配列した実験は抽象洋服形と結合させることで傾向がみられると考えられ 3) 点と方形を結合した実験は、講義前後の傾向は近よっている 4) 抽象洋服形と点を結合させた実験では、*tension* の講義後の数値が増加している。